シンガポールにおける日本漫画およびアニメ：ブームとその影響

呉　　偉　明

はじめに

大衆文化大国である日本は，九十年代以降アジア各地で日本大衆文化熱を引き起こした。最近，シンガポールの若者の中で，日本の漫画，アニメ，ビデオ・ゲーム，テレビ・ドラマ，音楽，キティちゃん，カラオケ，ファッション，寿司，映画，プリクラ等，様々な日本大衆文化が大流行している。この論文は日本大衆文化の原点といえる漫画とアニメのシンガポール進出とその影響について，歴史および社会文化の角度から分析する。

ブームの背景

日本は世界最大の漫画とアニメ輸出国になっている。日本漫画とアニメは，アジアでナンバーワンの座を誇っている。日本漫画とアニメからの翻訳と吹き替えがないアジアの主な言語は，一つもないといっても過言ではない[1]。

では，いったい日本漫画とアニメが，シンガポールおよびアジア各国に入ってきたのは，いつ頃であろうか。東南アジアにおける日本漫画の歴史は，戦前まで遡ることができる。

戦前，シンガポールには，数千人の日本人が居住しており，日本漫画は，日本人によって発行されていた新聞や雑誌に掲載されていた。当時，漫画の読者のほとんどは在星日本人であり，シンガポール人とは無縁であった。

戦時中（1942-1945年）になって，漫画，音楽，映画（アニメ映画も含む）などは，日本を宣伝するものとして利用されたことから，日本漫画はシンガポールおよびアジア各国で広がった。（現キャセイビルディングにある）シンガポールの宣伝部だけでも，日本から数十名の漫画家が招聘されており，彼らは，大量の政治的漫画を制作し，宣伝部の現地職員に対して日本漫画の訓練を施した。当時，漫画本や漫画雑誌がなかったため，漫画はポスター，新聞，雑誌，教科書や紙芝居の中に登場した。一方，連合軍やマラヤ共産党もまた，反日漫画を東南アジア各地にばらまき，日本と「漫画戦争」を展開した[2]。

戦後，日本漫画のアジア各地における影響は，日本人の集団帰国によって途絶えた。その後，1970年代になって，ごく一部の日本漫画の中国語版が台湾から輸入されたが，それを講読するシンガポール人はほとんどいなかった。当時，アジアで最も受け入れられていた漫画は，香港のカンフー漫画であった[3]。

日本の漫画とアニメは，日本漫画の中国語海賊版の輸入と地元のテレビ局の日本アニメ放送という二つ要因によって，1980年代に本格的にシンガポールに流入した[4]。

1980年代のアジアは，「海賊版天国」だと言える。日本漫画のアジアへの進出と海賊版の増加には密接な関係があると考えられる。当時，日本の出版社は，国内市場のみを重視し，海外での海賊版に対しては，さして注意を払わなかった。アジア各国では，著作権を保護する法律が整っておらず，それに対する意識も薄かった。そのような状況の中，アジアの出版社が勝手に日本漫画を翻訳し出版することは普遍的であった。台湾，香港，マレーシア等における日本漫画の中国語版の全てが海賊版であった。これらの海賊版の多くがシンガポールに入ってきて，第一代の日本漫画の読者を育てた。1980年代の日本漫画海賊版の翻訳と印刷レベルは完全ではなかったが，種類も豊富で値段が手頃であったため，シンガポールの若者に受け入れられた。台湾の出版社が1960，1970年代に日本で人気を集めた『鉄腕アトム』，『キャンディ・キャンディ』，『ジャングル大帝』，